

次の文章を読んで、以下の各問に答えなさい。

宮崎駿の男性的なものへの複雑な態度が最も A タン的に表れているのが、「天空の城ラピュタ」だろう。1986年に公開された同作は、宮崎駿がスタジオジブリを設立してから初めて手がけた長篇作品であり、その職業人としてのターニング・ポイントと言える。しかしそれ以上に、本作は宮崎駿という作家にとつてのターニング・ポイントなのだ。繰り返しテレビなどで放映された国民的作品だが、論を進めるために内容を簡単に紹介しよう。

主人公の少年・パズーはさびれた鉱山町で働く孤児だ。死別した父親は飛行機のパイロットで、あるフライト中に空中に浮遊する人工島を発見したという。その人工島＝ラピュタは超古代に存在した優れた科学文明の産物だが、何らかの理由で滅び、今は打ち捨てられたまま、空中に放棄されている。その存在をパズーの父は帰還後に訴えるが、世間は彼を相手にしない。その結果、パズーの父は「うそつきよばわりされて死んで」しまう（自殺?）。残されたパズーの夢は、いつか自分も飛行機のパイロットになり、自分の力でラピュタを再発見して父の B ことだ。

これが物語冒頭に示される主人公の生い立ちだが、この時点で既にこの物語が男性的なものの決定的な敗北から始まっていることが分かる。本作においてラピュタとは男性的なロマンティシズムと自己実現の象徴だ。そしてパズーの空を飛ぶこと＝ラピュタへの憧れは、失われた父性と密接に結びついている。パズーはその後少女を救うべく空へ飛び立つのだが、その冒険は頼かしい女性への接縁ではなく失われたその回復として位置づけられている。パズーの暮らす鉱山町にはたくましく気持ちのいい男たちが働いているが、その町がそう遠くない将来にさびれていくことが示唆されている。そう、この「男性的なもの」は既に失われ、天空の城から地上の鉱山町に墮ち、さらにその C 地上の町での理想化されたコミュニティ（パズーの親方が代表する鉱山の男たち）もまた、斜陽を迎えているのだ。

そして、そんなパズーの前にもう一度空を飛ぶ＝冒険の D 契機として、ある日少女がはるか上空から舞い降りてくる。飛行船から落下したというその少女＝シータは「飛行石」という特殊な能力を秘めたアイテムを持つ。シータを助けたことから、パズーは彼女を狙う軍隊と空中海賊に追われることになる。ここでパズーは町の人々の助力を得て大立ち回りを演じる。まさに少女を救うべく巨大な敵を相手に大活躍——ボーイ・ミーツ・ガールの冒険譚としては理想的な展開だ。

しかし、パズーはこの時点ではまだ「飛べない」。空を飛ぶのではなく、坑道に深く潜ることで逃避を試みたパズーとシータは、結局軍隊に出口に先回りされ、囚われてしまう。軍隊に同道する政府のエージェントのムスカはパズーの命を交渉条件にシータの協力を取り付ける。パズーはムスカに数枚の金貨を握られ、解放される。決定的な敗北が、一度パズーに訪れるのだ。

映画は、そして宮崎駿がつけて信じていた世界は、いったんここで終わって、敗北して、少年は少女を救えなかった。E 一度も空を飛ぶこともなく捕えられ、逆に少女に命を救われ、彼女を金貨数枚で売り渡してとぼとぼ帰宅したのだ。

だが、映画はここから F 息を吹き返す。G 落胆したパズーが帰宅すると、そこはシータを狙っていた空中海賊「ドローラ一家」が占拠している。彼らは熟年女性のドローラとその息子たちからなる家族経営の「海賊」だ。偉大な母性と、小さな子供たち——ドローラ一家はその後宮崎駿作品に頻出する、「母」的なものの支配するコミュニティの原型だ。

ドローラはパズーを「情けない」と罵倒する。「えらそうな口をきくんじやないよ。娘っ子ひとり守れない小僧っ子が」「いじけてノコノコ帰ってきたわけかい。それでもお前男かい」と、偉大な母が少年の敗北（父性の獲得の失敗）を宣言するのだ。そしてパズーはシータを奪還をもくろむドローラに「ほくを仲間に入れてくれないか」と言う。シータを助けたいと主張するパズーにドローラは「パズーの敗北を確認するようにさらに告げる。「あまたたれんじやないよ。そういうことは自分の力でやるもんだ」と。H こうした敗北の確認を儀式のように経て、ドローラはパズーを受け入れる。」男性性の軌着陸したこの鉱山町に別れを告げ、肥大した母性の傘下に入ることをドローラはパズーに要求し、パズーはそれを受け入れるのだ。

こうして映画は再出発する。決定的な父性の断念と母性の庇護下への参入を経て、パズーの「冒険」は自分の家から再出発するのだ。そして、パズーはこのとき初めて「空を飛ぶ」。空賊の使用する小型の飛行機にドローラ＝母と同乗することでパズーは初めて「空を飛び」、シータの救出に向かうのだ。パズーとドローラ一家はシータの奪還に成功し、以降、物語は軍とドローラ一家のラピュタ発見競争、ラピュタ到着後の対決へと移行していく。

この物語後半においてパズーにはその後何回か飛行機を操り飛行するシーンが描かれるが、そこにはいずれもシータが同乗している。ドローラはシータを評して言う。「あたしの若いころにそっくりだよ」と。実際ドローラの自室には彼女の若いころの「写真」が貼ってあるがその姿はシータそっくりだ。

映画の後半に再登場したシータは、守られるべき少女としての表面性を維持しつつも、「守られる」ことで少年の生に意味を与え、実のところ彼を守っている庇護者＝「母」としての本性を隠そうとしない。そんなシータが同乗することで、パズーは空を飛ぶことができる。もはや「母」なる存在の庇護なくしては、少年は空を飛べないのだ。

ラピュタ到着後は、飛行石を手にしたムスカと主人公たちの対決がクライマックスとして描かれる。このとき悪役であるムスカは映画前半で、いや映画開始以前の段階で敗北を迎えた K の体現者として振る舞う。曰く、「人類の夢」であるラピュタは滅びず、何度でも蘇るのだ、と。対してシータはこう主張する。

今はラピュタがなぜ亡びたのか私よくわかる [中略]

土に根をおろし風とともに生きよう

種とともに冬をこえ鳥とともに春を歌おう

どんなに恐ろしい武器を持っても

沢山のロボットを操っても

土から離れては生きられないのよ

ここで注目すべきは、映画前半でパズーを駆動していた男性的な自己実現＝空を飛ぶことを肯定し、実践しているのは悪役のムスカであり、ヒロインのシータはその不可能性を説いている点だ。ムスカはいわば宮崎駿が諦めたものの体現者だ。そして宮崎駿の諦念を映画前半での敗北で体現したパズーは、父親の夢でもあったはずのラピュタを否定する立場に立つ。パズーはシータに加担してムスカと対決し、シータの家に代々伝わる「滅びの呪文」でラピュタを崩壊させる。かつて父親が夢見た存在を、男性的な自己実現の象徴を、それも既に一度は滅んだものを、二度と蘇らないように止めを刺すのだ。死んだ父親の夢を否定し、目の前にいる L 少女＝母の論理に加担して、パズーはラピュタを滅ぼしたのだ。

以上のように、一見ボーイ・ミーツ・ガールの冒険譚である「天空の城ラピュタ」は、実質的にはむしろ

その不可能性こそを描いていたと言えらるだろう。ラピュタとは、男性性が完全に棄り去られた「墓所」なのだ。実際「天空の城ラピュタ」以降の宮崎駿は少年が少女を救う冒険譚も描かなければ、少年が空を飛ぶことも描けなくなってしまう。例えば「もののけ姫」のアシタカはサンとエボシ、野生と文明を象徴する二人のヒロインの間を往復しながら「見守る」だけで、主体的なコミット⁽¹⁾はできない。

そもそも以降の宮崎駿作品においては男性主人公がほとんど成立していない。「もののけ姫」以外に男性主人公が立てられたのは「紅の豚」「ハウルの動く城」(2004)「風立ちぬ」の3作のみであり、これらはしかも「少年」ではなく大人の主人公が設定されている。

「紅の豚」の主人公であるポルコ・ロッソはまさに「飛行機乗り」として登場する。彼は戦没した仲間のパイロットたちを思いながら飛び続けている。そう、ポルコはまさに失われた男性性を思いながら飛んでいるのだ。その今も飛び続けている自身は、自らかけた呪いによって「豚」の姿になっている。同作もまた、男性的な自己実現と空を飛ぶことが強く結びついている。それゆえに今も飛び続けているポルコは、そして失われたはずのものを、擬似的に回復しているポルコは自らの身体に呪いをかけざるを得ないのだ。これはその前作である「魔女の宅急便」(1989)のヒロイン・キキが少女じみた悩みの重力に負けそうになりながらも、そのままの姿で終始空を飛び続けたのとは対照的だ。

続く男性主人公作品である「ハウルの動く城」では全能感の強い美青年ハウルが、物語冒頭でこそ少女と老婆(母)の間を往復する女性＝ソフィーをその傍らに配置されることで、**N** 優雅に空を飛ぶ。しかし、迫りくる戦争を前に、ハウルもまたソフィーを守るために自ら異形の姿に変化して空を飛び、戦地に赴く。

そして彼らは、バズーがそうであったように「母」的なものの庇護下になければ、もはや空を飛ばない。バズーは「母」に守られていれば飛べた。ポルコは自らに呪いをかけ異形の者になれば飛べた。異形の者になるとは、現実とは切断された虚構を生きるといことだ。そんな虚構の世界に生きる男たちのまごとのような飛行機遊びとそこにこめられたロマンティックな——政治的には無力であるが、閉鎖的な共同体内部の文脈を共有することで文学的には成立する——自己実現をあたたく見守ることで肯定してくれる存在、子供の「ごっこ遊び」を優しく見守る「母」的な存在が「紅の豚」のヒロインのジャーナである。

豚に姿を変えたポルコにとっての「飛行」は死のイメージと強く結びついていた。ポルコの異形姿とは事実上、男性的なものの不可能性の体現であり、同時にその死後の世界における実現であったと言える。「母」の庇護下に置かれたポルコの異形化が意味するのは、かつてバズーが手にしたような「母」の庇護下における「飛行」は、実は宮崎駿にとってもむしろ死の世界と接続するものだったということだ。そしてハウルもまた「母」の愛と異形のものへの変化が両方あって初めて戦争中(過酷な世界)を飛べるのだ。

私がそう考えるのは、「崖の上のポニョ」の存在があるからだ。

同作の主人公宗介の家もまた父親が海に出て陸に帰らない家庭として描かれる。「崖の上のポニョ」における「海」は物語世界を支配する母性の象徴だ。宗介はヒロインのポニョと出会い、彼女と一緒に小さな冒険をクリアすることでその夫としての資格を得る。

だがその冒険は、全てポニョの母である海の精＝グランマンマレの監督下で行われる**P**安全なゲームにすぎない。ゲームをクリアした宗介とポニョの運命も、それぞれの母親同士「話し合い」で決定される。

「崖の上のポニョ」において、男とは母なる海を漂流する**O** 奇る迎なき個にすぎない。宗介の父親が決して陸に帰還することがないのと同じように、ポニョの父親もまた矮小な存在として描かれる。彼はその「妻」であるグランマンマレ(海の精)の各所に存在する複数の夫たちの一人にすぎず、ほとんど彼女に会うことすらかなわないのだ。

そして、そんな「崖の上のポニョ」の世界には「死の香り」が満ちあふれている。

物語の中盤、ポニョが宗介に会うために人間に変身して上陸する。このとき、大津波が宗介たちの住む町を襲い、映画の舞台はまるまる海に飲みこまれる。その後、宗介とポニョはグランマンマレの監督下で完全な冒険を繰り広げるのだが、この「胎内」のような世界はほとんど死後の世界のように描かれる。劇中には宗介の母親が動める女性専用の介護施設が登場するのだが、そこに暮らす老婆たちはこの津波に飲みこまれることによって四肢の不自由から回復し、自由に動き回るようになる。まるで、天に召されたかのように。あるいは宗介とポニョは「冒険」の最中に、奇妙な若夫婦とその幼子と出会う。津波から避難中だというその若夫婦のどこが奇妙なのか。それは彼らの服装が大正時代のそれであることだ。

物語の進行に何も寄与することなく挿入されるこの若夫婦の登場は何を示すのか。同作の公開当初、これらの要素は「死」の比喩であることと取り上げられることが多かった。例えば「読売新聞」2008年7月9日掲載の、同作のプロデューサー、鈴木敏夫のインタビューは、同作の描く世界が「死後の世界」であることを半ば前提として行われている。

あっちの世界に行って帰ってくる話というのは、これまでも描かれてきた題材だし、宮さんも取り組んできました。「ポニョ」でそれを突き詰めたと言えるかもしれない。生命が誕生する間際には、死がすぐそばにあるんですよ。生きていくのも同じじゃないですか。

つまり、物語中盤の「津波」によって崖の上の町は完全に飲みこまれ、以降は登場人物たちが幽霊となつて行動している、という解釈だ。だとすれば、介護施設の老婆たちの「回復」も、大正時代の**R** をした若夫婦の存在も説明がつくだろう。

「崖の上のポニョ」において一見、甘いボーイ・ミーツ・ガールの物語を完遂し、成長を遂げたかに見える宗介だが、その「冒険」はそんな男の子のファンタジー(彼に救われるべき女の子が一方的に押しかけてきてロマンを与えてくれる、というファンタジー)を**S** お膳立てしてくれる、偉大なる母性の「胎内」で完結した「ごっこ」遊びに等しいものとして提示されているのだ。そして重要なのはこの「死」のイメージが同作において母胎のイメージと強く結びついていることだ。

「崖の上のポニョ」におけるポニョの母＝グランマンマレの庇護下にある(胎内にある)世界は事実上「死後の世界」として描かれている。宗介とポニョの「冒険」は、産道のような暗いトンネルを抜けることで終わりを告げる。その後、まるで彼らを産み落とすか否かを決定するかのように、彼らの運命はその母親同士の話し合いで決定される。ここで表現されている強烈な母胎回帰を中心に据えた死と再生において、父性の(宗介の、あるいは彼らの父親の)介入する余地はない。ここにおいて父性とは単に母性から、それも「ごっこ遊び」として与えられるだけの存在にすぎないのだ。

しかし、これまで見てきたように宮崎駿が死後の世界を描き始めたのは、そのずっと前のことだ。「天空の城ラピュタ」における決定的な展開(断念)を経たときから、宮崎駿は少なくとも男性主体の目を通しては生者の世界を描けていないのだ。そして男性主人公が設定されたとき、世界は再生することなく単に死の世界に変貌するのだ。

(注)

(1) コミット かかわりありこと

(宇野常寛「母性のデイトピアI 接触編」早川書房より。原文の一部を改変している)

問1 下線部A「タン」を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものはどれか。下記の選択肢からを選び、記号で答えなさい。

- a 昨年は、多事タンだった。
- b 知らないうちに犯罪にカタンしてしまった。
- c タントウ直入に申し上げます。
- d あの小説には、カンタンせざるを得ない
- e 彼はいつもヘイタンな話しぶりだ。

問2 空欄 B に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 危機をしのぐ
- b 威厳がゆらぐ
- c 苦勞をしのぶ
- d 心血をかたむける
- e 汚名をそそぐ

問3 下線部C「地上の町での理想化されたコミュニティ」が指しているものの説明として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a たくまさを誇れる社会集団
- b 男性を中心とした共同体
- c 冒険者たちの集団
- d 鉱山によって成り立つ地域社会
- e すがすがしい連中の集まり

問4 下線部D「契機」と同じ内容をあらわす語句として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 起爆剤
- b 口火
- c 大詰め
- d 引き金
- e 呼び水

問5 空欄 E に入る接続詞として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a とはいくもの
- b それどころか
- c それゆえに
- d もしくは
- e しかしながら

問6 下線部F「息を吹き返す」とあるが、筆者はどのような状況を表そうとしているのか。その説明として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 少年から青年への内面の成熟
- b 主人公の町での生活への復帰
- c 終息しそうな物語の再稼働
- d 飛行機製作への再挑戦
- e 失われた父性への目覚め

問7 下線部G「落胆」の同義語として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 失念
- b 錯乱
- c 遺失
- d 降格
- e 喪心

問8 下線部H「こうした敗北」の指し示す内容として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 少女を救出できなかったこと
- b 他者の援助を要請したこと
- c 大口をたたいたこと
- d 無為のまま帰宅したこと
- e 飛行能力を発揮できなかったこと

問9 下線部J「男性性の軟着陸はこの鉱山町」とあるが、そのときのバズーのおかれている状況の説明として適切な文章はどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 他者の保護のもとで、のびやかに暮らしている様子を示している
- b 微妙なバランスの上に、かろうじて存在している状態を示している
- c 周囲への配慮を欠かすこと無く、注意を払っていることを示している
- d 努力して得たものでは無く、与えられたものであることを示している
- e 欲望を捨てた、あきらめの上に成り立っていることを示している

問10 空欄 K に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 母性の庇護下にある存在
- b 父性獲得の挫折
- c 男性的なロマンティシズム
- d 矮小な子供っぽさ
- e たくましい肉体的性

問11 下線部L「少女＝母の論理」が指し示す内容の説明として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 父性の支配に終止符を打ち、母系社会を打ち立てること
- b 大地に根ざした生活を理想とし、争いを忌避すること
- c 滅亡を受け入れ、死後の世界に思いをはせること
- d 人類の夢に身をゆだね、夢の探求に一生を捧げること
- e 他者の庇護のなかで過ごし、安逸な生活を送ること

問12 下線部M「擬似的に回復している」とされる理由として適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 飛行機が強さの象徴では無くなっているから
- b 戦没した仲間の飛行機乗りとはべだたりがあるから
- c 母性的なものによって飛行が可能だから
- d 男性的なものへの継承は不可能であるから
- e 飛行することはすでに夢の達成では無くなっているから

問13 下線部N「優雅」の対義語として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 粗野
- b 低回
- c 劣悪
- d 傷心
- e 欠陥

問14 下線部P「安全なゲームにすぎない」とされる理由として適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 虚構のなかのままごとくにすぎないから
- b 現実と切断されることで成り立つ世界だから
- c 母性的なものの庇護下での出来事だから
- d 今は失われてしまった男性世界のものだから
- e 閉ざされた世界での冒険であるから

問15 下線部Q「常る辺なき」の同義の語句として適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 身の置きどころが無い
- b 座り心地が悪い
- c 底意地が悪い
- d 居場所がない
- e いたたまれない

問16 空欄 R に入る語句として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a なりわい
- b いでたち
- c みはらし
- d まつりごと
- e そえもの

問17 下線部S「お膳立て」の同義語として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 手回し
- b 試金石
- c 用意
- d 仕度
- e 下ごしらえ

問18 筆者は、宮崎駿その作品において断念したものについて論じている。その断念したものとは何か、句読点を含めて50字以内で書きなさい。解答は、解答用紙の記述問題解答記入欄に書きなさい。